

異世界召喚されたら
無能と言われ
追い出されました。

ISEKAISYOKAN SARETARA MUNOU TO
IWARE OIDASAREMASHITA.

この世界は
俺にとって **イージーモード**でした

6

WING

Illustration)
クロサワテツ

アイリス —
晴人の婚約者の一人である、
ベルデイス王国の第二王女。

結城晴人 ゆづきはると —
クラスごと勇者召喚された高校生。
無能だからと追放されたが、神様
からのお詫ひチートで圧倒的な
力を手に入れる。

フィーネ —
晴人のよき理解者であり、
彼と婚約した冒険者。

クゼル —
グリセント王国騎士団
元副団長の、Aランク冒険者。

登場人物紹介

ダムナテリオ —
突如帝都に現れた、魔王軍
四天王の一人。

シャルロット —
ガルジオ帝国の第三皇女。
戦姫と呼ばれる実力者。



第1話 ガルジオ帝国到着！

俺——結城晴人は、ある日突然、クラス丸ごと異世界に勇者として召喚された高校生。

だが俺には『勇者』の称号がなく、無能と言われ追い出され、しかも召喚主であるグリセント王国の連中に殺されかける。

そこで神を名乗る人物と出会った俺は、チートなスキルの数々を手に入れ、ペルデイス王国で冒険者としての活動を始める。

闘技大会が開催されるという情報を聞き、ガルジオ帝国へと向かう俺たちは、道中でベリフェール神聖国に立ち寄ることに。

そこでペルデイス王国第一王女のアイリスの友達であり、聖女様と慕われるイルミナ・ハイリヒと出会った。

彼女が誘拐されたり、強力な悪魔が召喚されたりと、波乱はあったものの、俺や仲間たちの力で何とか事件は解決。

その結果、イルミナが新たな俺の婚約者となるのだった。

それから俺たちは、当初の目的である闘技大会に参加するためにベリフェール神聖国を出発する。ガルジオ帝国の帝都に向かっているメンバーは、ベリフェール神聖国の神都に足を運んだのと同じ八人。

冒険者であり俺の婚約者でもあるフィーネ。そして同じく俺の婚約者であるアイリスと、そのお付きのアーシャ。それから、俺と一緒にこの世界に召喚された勇者の一人で俺の婚約者でもある鈴乃、元エルフの里のお姫様でフィーネらと同じく俺の婚約者のエフィル。そしてグリセント王国騎士団で副団長をしていたクゼル、ナルガディア迷宮ボスのドラゴンだったが人化して俺に付き従うゼロ。

そんなお馴染みの面々で、帝都へと馬車を走らせているのだが……

二週間という旅路の暇を潰せるものが何もなく、すっかり時間を持て余してしまっていた。

御者役と警戒役は持ち回りで、残りのメンバーは俺が作った亜空間——もう一つの世界にある屋敷で過ごすことにしている。

そうして俺がゴロゴロしていたある日、皿を持ったアイリスが俺のもとにやってきた。

寝転がっているため、皿に何が載っているかは見えない。

「ハルト、お菓子を作ってみたから食べて！」

起き上がったって皿の上を見ると……おそろく炭化したのだろう、真っ黒な何か載っていた。

形とサイズの的に、クッキーのつもりか？

俺は冷静を装い、アイリスに尋ねてみる。

「ア、アイリス一人で作ったのか……？」

「当たり前よ！ お菓子くらい一人で作れるわ！ りよ、料理はちよつと苦手だけどね……」

前半の勢いが気のせいだったかと思うような後半の小声に、「ちよつとどころじゃないだろう！」とツツコミを入れたくなったが、今はそれどころじゃない。

これは命の危機である。

以前、アイリスがホットケーキを作ってくれたことがあるのだが、その時もやはり、出来上がったものは黒かった。

味に関しては『気絶するほど個性的な味』とだけ言っておこう。

俺は恐る恐る、気になったことを確かめる。

「お、お菓子は作ったことあるのか？」

「一度だけあるわ！ お父さんにあげたら、卒倒するほど美味しかったみたい！」

それは違うだろう!?

ディランさん、一国の王なのに……

「えっと、その後ディランさんは何か言わなかったのか？」

「んーと、たしか今後料理する時は誰かと一緒にするように、つて。美味しすぎる料理を作られたら困るってことかしら？」

それには答えられない。

俺はアイリスが悲しむ姿を見たくないからな。

すると当のアイリスは、ずいっと皿を差し出してきた。

「早く食べてみて♪」

「お、おう。いただくよ……」

黒いクッキー（飯）を一枚手に取る。

ホットケーキの時と同様に黒色のオーラが視えるのは気のせいだろうか？

俺が意を決して口に運ぼうとしたその時、クゼルと鈴乃がやってきた。

「何をしているのだ？」

「そ、それってお菓子……？」

俺が答えようとするよりも早くアイリスが答えた。

「そう、クッキーよ！ 二人も食べてみて！」

そう言っって皿を差し出すアイリスに、鈴乃は「うっ……」と呻いた。

多分だが、鈴乃もオーラを幻視したのだろう。

鈴乃が俺を見る。

「ね、ねえ……」

「聞くな。俺は食べる」

鈴乃が俺に戦慄の眼差しを向けている。

聞かないでもわかる。鈴乃は「それ、マジで食べるの？」と思っっているのだろう。

「アイリス、私も一つ」

「えっ」

すると、俺と鈴乃が視線を交わしている中、不意にクゼルがクッキーを一枚手に取って、口に放り込んだ。

ガリッポリッと、クッキーにはありえない、固い音がしている。

しかしクゼルはそのままゴクリと呑み込んだ。

「うむ。少し苦みがあつて美味しい。もう一枚いただこう」

「えっ？ マジ……？」

反射的にそんな言葉が出してしまったが、アイリスは俺の言葉に気付いていないようだった。

「ああ。ハルトとスズノも食べたらどうだ？」

「あ、ああ」

「そ、そうだね」

俺と鈴乃は一度顔を見合わせ、その黒いクッキーを口の中に放り込み——二人して倒れた。

「ア、アイリス……お、お菓子作りと料理は、アーシャと一緒に、な……」

「こ、これは無理だよお……」

《スキル〈状態異常無効〉の発動を確認しました》

俺のエクストラスキルしんちゅうばんしょう森羅万象の補助機能が生み出した人格、エリスのそんな言葉が聞こえたが、俺の意識は暗い底に落ちていった。

それからどのくらい経ったのだろうか。

目を覚ました俺の隣にはフィーネとエフィル、アーシャが心配そうに座っていた。

まさか状態異常無効を貫通して意識を失わせるとはな……

俺の隣には鈴乃が寝かされており「や、やめて、もう無理だよお……」と、夢の中の何かに苦しんでいる様子だ。

俺と鈴乃が気絶する原因となったアイリスを探すと、近くのソファアでスヤスヤと気持ちよさそうに寝息を立てている。

どれくらい時間が経ったんだろう？

「俺、生きてたんだ……」

「あの、何かあったのですか？」

目が覚めた俺にフィーネが聞いてくる。

「——アイリスが作ったクッキーを食べた……」

その瞬間、三人が凍り付いたように固まり、アーシャが慌てて口を開いた。

「は、ハルトさん、体調は大丈夫ですか!？」

「大丈夫、だと思う。状態異常無効が発動したお陰かも」

俺の言葉に、アーシャが顔を引きつらせる。

それからしばらくして目を覚ました鈴乃が、衝撃の言葉を口にした。

「私、毒耐性獲得してるんだけど……」

その言葉に、絶句する俺たち。

今後アイリスが料理を作る際は、必ず誰か一人は監視を付けることになるのだった。

そして俺たちは無事、国境の街に到着した。

国境の手前側に宿泊施設があったのでそこで一泊し、補給を済ませた翌朝、俺たちはガルジオ帝國入国のための検問を受ける。

「何をしにこの国へ？」

そう尋ねてくるガルジオ帝国の兵士に、俺は身分証となる冒険者カードを見せて答える。

「帝都で行なわれる闘技大会に出ようと思つて。まあ、仲間の腕試しだな」

俺のランクを見て驚いた兵士だったが、すぐに冷静さを取り戻して「なるほど」と頷うなずいていた。

「すみませんが全員の身分証もいいですか？　いくらEXランク冒険者様の仲間でも、これだけは規則きそくでして……」

申し訳なさそうに聞いてくる兵に、全員が身分証を提示した。

もちろん、アイリスのものは王女であることは伏せてある。

「……確認しました。ようこそ、ガルジオ帝国へ。それでは大会、頑張ってください」

俺たちは検問所を抜けてガルジオ帝国に入り、帝都に向けて馬車を走らせるのだった。

道中で魔物は出たものの問題なく撃退し、俺たちは無事に帝都の前まで到着した。

現在は帝都を囲う壁の前で、検問待ちをしているところだ。

大会が近いからか、検問は多くの人で列を成している。

「ハルトさん、帝都って大きいですね」

「そうだな。もしかしたらペルデイス王国の王都よりもデカいんじゃないか？」

フィーネに答えた俺だったが、そこにアイリスが口を開いた。

「ガルジオ帝国は世界で一番大きな国だから、帝都が大きいのも当たり前よ」

「世界一大きな国か……」

呟つぶやいた俺は、帝都を囲う大きな壁を見上げた。

とても高く、門も壁同様に巨大だ。帝都の壮大さを感じさせる。

にしても……

「暇ひまだなあ……」

かなり時間がかかつていて、やることもないのだ。

初めて来た国なので、このような待ち時間も悪くはないけど、それにしたって暇ひますぎた。

すると、鈴乃が尋ねてくる。

「晴人くん、大会には誰が参加するんだっけ？」

「フィーネ、アイリス、クゼルは出るって言つてたな。ゼロとアーシャ、エフィルは出ないみたい

だけ……鈴乃はどうする？」

鈴乃は少し考える素振りを見せて答えた。

「私もパスかな。考えてはみたんだけど、私は回復系が主だから試合はちよつとね」

「そうか？　戦い方次第では強いと思うけど」

「うーん、でも今回はやめとくよ。ただ、今度訓練に付き合っしてほしいんだけど、いいかな？」
「ああ、いいよ」

というわけで、大会出場はフィーネ、アイリス、クゼルになった。

団体戦もあるそうなので、そちらには三人に加えて俺も参加する予定だ。

それからしばらく待ち続け、ようやく検問を抜けて馬車を進ませた俺たちは、帝都の街並みを目にした。

「おおー！」

「ずいぶんと人が多いですね」

俺とフィーネがその声を上げると、アイリスが横でため息をつく。

「相変わらずこの時期は多いわね」

「ん？ アイリスは来たことがあるのか？」

俺たちはアイリスの方に顔を向けた。

「一度だけ。その時はアーシャもいたわよ」

「はい。私も同行しました」

そうだったのか。

まあ、王女なんだから来たことがあってもおかしくないか。

「でも、当時とほとんど変わっていないわ」

「そうですね。新しいお店が少し増えたくらいでしょうか」

「へえ、それなら滞在中は案内してもらおうかな」

「そんなに期待しないでね」

それから俺たちは通りすがりの人にオススメの宿を聞き、馬車を向かわせる。

人が多い時期ではあるものの、運良く宿を確保できた俺は、フィーネ、アイリス、クゼルを連れて冒険者ギルドに向かうことにした。

どうやら闘技大会は、ギルドで参加受付をしているようだ。

大会に参加しない鈴乃、エフィル、アーシャ、ゼロは観光して回るらしい。

一瞬心配になったが、ゼロが護衛にいたので問題はないだろう。

しばらく歩いて、俺たちは冒険者ギルドに到着する。

やはりどの国の冒険者ギルドも、建物は同じような形なので一目でわかる。

俺が両開きの扉を開けて中に入ると、大会が近いからか人が多く、受付には列ができていた。

「一番並んでいる列ができています。受付には、「大会受付」と書かれた看板が高々と掲げられていた。『凄い人の列だな』」

「そうですね……」

「ハルト、人が多いわよ」

「アイリス、しょうがないだろう」

「むう……」

「この我慢も戦うためだ」

混雑を嫌がってむすつとするアイリスに、クゼルがそう言う。

うん。クゼルは相変わらず戦うことしか考えてないな。

待っている間、俺たちが雑談をしていると、視線を感じたので周りを見渡した。

フィーネ、アイリスの二人も視線を向けられていることに気付いたのか、俺の服の裾すそを掴まむ。

「無視してればいい」

「この流れ、多分絡まれると思うんですけど……」

「フィーネに同意するわ」

おいおい二人とも……てかクゼルはスルーですかい。

「さすがに毎回毎回そんなことあるわけがないだろ」

俺はとりあえず否定しておいたが、アイリスとフィーネにジト目を向けられる。

フラグを立てるなどでも言いたいのか？

そうこうしているうちに、俺たちの番になる。

「次の方どうぞ——って、ここは遊びで来るような場所ではありませんよ？」

俺たちを見てそう言った受付嬢。

受付嬢に賛同するかのように、後ろから声が聞こえてきた。

「ハハハッ！ その通りだ。遊びの大会じゃねえんだぞ？」

「今すぐその嬢ちゃんたちを置いて帰りな」

「俺たちが使った後で帰してやるよ」

「その時にはもう壊れちまっているだろうけどよ」

さつき俺たちに視線を向けていた三人の男たちはそう言って、フィーネたちの体を下卑げびた視線で見つめた。

「ほらハルトさん。絡まれるって言ったじゃないですか……」

「そうよ」

くっ、何も言い返せない……

「じゃあハルトさん、お願いしますね？」

「しっかりやるのよ？」

フィーネとアイリスからの圧が凄い。

ちらりと視線を向けると、クゼルはちらりと周囲を見回して、興味なさげにしていた。

……強そうなやつがいらないからどうでもいい、みたいな感じか？

「……まあ、元からやるつもりだったけどな」

俺はこちらを見る荒くれ者どもに、冷めた視線を向けた。

「どうした？ 渡す気になったか？」

「今晚は眠れないな！」

「ビヤハハハッ！ まったくだぜ！」

「おい」

「——ッ!?」

俺は低い声色で男たちの言葉を遮り、同時に『威圧』スキルを放った。

「はあ……まったくもってツイてない」

「まったくです」

「ハルトがあんなこと言うから」

「俺のせいかな？」

「当たり前です（よー！）」

少し怒ったように言うフイーネとアイリス。

俺としては一切フラグを立てた覚えなんてないぞ!?

まあいずれにしてもこうなった以上、今はゴミを処理しないとイケない。

俺は威圧を受けて黙っている男たちに向かって口を開いた。

「——おい、ゴミ以下の虫けら共。今ここで死ぬか、そのまま帰るか。選ばせてやる」

殺気を振りまきながら聞くと、三人の男たちは尻もちをつき、周囲の者たちまで青ざめていた。

ここにきて、ようやく実力差がわかったのだろう。

「か、かかか帰る！ 帰るから許してくれ！」

「悪かった！ 本気で言ったわけじゃないんだ！」

「頼むから許してくれ……！ この通りだ！」

尻もちをついている男たちは必死に命乞い（いのちご）を始める。

「立て」

「「……え？」」

「聞こえなかったのか？」

威圧をさらに強くする。

「「は、はひいッ！」」

俺は立ち上がった男たちに制裁を加えることにした。

といつても、何をするかは考えていない。

説明されるだけで、予選自体は翌日からです。予選の期間は四日間で、一日空けて再び四日間を使い、本戦が開催されます。その後、再度一日空けて、団体戦が三日にわたり開催されます」なるほど、結構長丁場だな。

受付嬢は話を続ける。

「その他、ルールについては、武器や魔法の使用は自由となっておりますが、相手を死に至らしめる魔法の使用は禁止されています。また、相手を殺してしまった場合、そのまま失格となり、処罰もあります。説明は以上になりますが、何か質問はありますか？」

特になかったので俺たちは首を横に振る。

「ではご武運を。それと先ほどの非礼、お許しいただきありがとうございます！」

「見た目で判断するのも程々にな」

深く頭を下げる受付嬢に俺はそう忠告し、冒険者ギルドを出ていくのだった。

「さて、大会出場の受付も済ませたし、どこか行きたいところはあるか？」

冒険者ギルドを出て早々、三人にそう尋ねる。

「ならハルトさん、観光していきませんか？」

「観光か……どこかそういうスポットはあるのかな？」

答えたのはフィーネではなくアイリスだった。

「闘技場を見に行ったらどう？ どの国よりも大きくて、美術的価値があると言われるほどよ。それに、大会の下見にもなるしね」

闘技場が美術的価値？ 元の世界のローマにあるコロッセオ的な感じか？

もしかしなくても、帝都に着いた時からチラチラ見えていた城とはまた違う、大きな建物のことだろうか。

「アイリスがそこまで推すなら行ってみるか」

「ならハルト、早く行きましょう♪」

「お、おい、アイリス！」

俺はアイリスに手を引かれる。

「アイリスだけズルいですよ。ハルトさんの隣は私ですから！」

すると対抗するように、フィーネが逆の腕にしがみ付く。

柔らかい感触が俺の腕に当たって気持ちいいのだが、スキル無表情ボウカシキエクスを使って表情に出ないように努める。

闘技場へと向かう中、人が多く周りからの視線が突き刺さっているのに気付いた。聴力を強化して聞き耳を立てる。

「チツ、死ねばいいのに」

「今すぐ爆発しやがれ」

「両手に華か……今すぐ爆ぜるッ！」

や、やべえ……

「二人とも、ちよつとは人目を気にしてくれないか？」

俺がそう言うと、フィーネとアイリスは一度周囲を見回して顔を赤くした。

「そ、そうですよね」

フィーネがしょぼんとしながら俺から離れた。

顔はいまだに赤いままだ。

だが、アイリスはどうしても離れなかった。

「あの、アイリスさん？」

「どうしたのハルト？」

「なんで離れないんだ？」

「逆に聞くけど、なんで離れないといけないの？」

アイリスが不思議そうな顔で俺を見上げる。

「なんでって……」

「別にいいじゃない！ 早く行くわよ！」

俺が答える前に、アイリスは俺の手を引く。

「アイリスだけズルいです！」

それを見て、フィーネが再度腕にしがみ付いてきた。

クゼルは相変わらず、面白そうに俺たちのことを見ているだけだ。

まあ、いいか。

やれやれと思いつつ、俺は闘技場に到着した。

「やっぱデカいな……」

俺は目の前の建物を見上げながら呟いた。

この大きさの建物なら、観客は二万人以上入るはずだ。

周囲には観光客がかなりいて、冒険者らしい恰好かっこうをした人もちらほら見かけた。

「なにポーッと見てるの！ 早く行くわよ」

「そうだな」

「たしかにここで立っていても仕方ないですからね」

「中も気になるな」

アイリスに促され、俺たち三人は闘技場を見学していくのだった。

第2話 闘技大会開幕!

それから一週間が経ち、とうとう闘技大会の開会式の日になった。この一週間、特にやることもなかったこともあり、俺たちはギルドで依頼を受けていた。特訓を兼ねてもいたので、コンディションはばっちりだ。

開会式のために、出場者たちや観客が闘技場に集まる。

この闘技場は、中央のステージを囲うようにして、階段状の客席が配置されている。まさにイメージしていたような闘技場のスタイルだった。

出場者がステージやその周りに集まってくると、全員にカードが渡された。

説明によれば、このカードには自身が出場する試合が表示される仕組みとなっているようだった。ほどなくして、ガルジオ帝国皇帝らしき男が二階のテラスに現れた。

燃えるように真っ赤な短髪に、同じく真っ赤な瞳。

見た感じは若く、まだ三十代前半ほどのようだ。

彼は闘技場の中に集う参加者たちを見回して、厳かに口を開いた。

「私はガルジオ帝国皇帝、オスカー・フォン・ガルジオだ。今回は我が国の闘技大会に集まってくれて感謝する。帝国は実力主義だ。力こそすべて、力ある者が絶対だ。この大会で勝利を勝ち取り、己の力を証明して見せる! 私からは以上だ」

盛大な拍手と歓声が闘技場に響く。

そんな中、俺はあの男がこの国の皇帝であることに納得していた。

ガルジオ帝国は完全なる実力主義で、皇帝の座すら、継承権を持つ者たちが力でもって奪い合うという。

それを踏まえて皇帝を観察すると、ある程度離れているここからでも、猛者の気配が伝わってきていたのだ。

歓声がおさまるまで手を振っていた皇帝は、悠々と自分が座っていた席に戻った。それから係の者によって、個人戦の説明が行なわれた。

一対一の個人戦を繰り返し返している場所は時間もかかるため、一組十数名のブロックを作り、勝ち残った者が本戦に進出するという形になるそうだ。

ブロックの数は十六個で、一日四ブロックずつ試合が行なわれる。

そうして残った十六名で、本戦のトーナメントが行なわれるというわけだ。

本戦の四日間のうち、最初の二日は一回戦を四試合ずつ、三日目は二回戦、そして四日目に準決

勝と決勝戦が行なわれる。

試合は明日からということで、宿に戻った俺たちは作戦会議を始めた。

予選のどのグループに自分がいるかは、受付に記載されていた。

「それで、三人はどのブロックなんだ？」

「私はAでした」

「私はCね！」

「私はEだな」

フィーネがA、アイリスはC、クゼルがEと。

うまく分かれたようだ。

フィーネとアイリスは明日、クゼルは明後日の試合か。

「分かれてよかったな。あとは本戦でどこで当たるか楽しみだ」

「はい！ 沢山鍛えたんです、絶対に勝ち上がります！」

「フィーネ、気合入ってるわね。私も負けないから！」

「こっちこそ、アイリスには負けないですから！」

フィーネとアイリスが気合いを入れる横で、クゼルは腕を組んでいる。

「私は戦えればそれで満足だ」

クゼルはまあ、わかってたよ。うん。いつも通りだね。

翌日、昼前からAブロックの予選が開始された。

俺たちが観客席に座って待っていると、そこにアナウンスが流れる。

『さーて、いよいよ待ちに待った闘技大会です！ 皆さん準備はいいですか!?』

観客席から「うおおー！」と叫びが上がる。

『今大会の司会を務めさせていただきます、帝都冒険者ギルドのニーナです！ よろしくお願

いし

ま〜す！』

「ニーナちゃんーん！！！！」

どうやら司会のニーナって子はかなりの人気者のようだ。

ファンらしき人たちがずっと叫んでいる。

『それでは予選Aブロックの注目選手のご紹介です！』

そうやって今大会の注目選手の名前を発表していくが、残念ながらフィーネは挙がっていない。

だが、注目されていないという事は逆に、最初から標的にされる確率がかなり低いとも言えた。

「ハルト！ フィーネを見つけたわ！」

「だな。まあフードを被ってるけど」

「フィーネは目立ちたくはないのだろうか？」

そんなことを考えていると、開始の「ゴング」が鳴り響いた。

◇ ◇ ◇

「ゴングが鳴った瞬間——否、フィーネはその前から既に、周囲を警戒していた。」

自身より背丈が高く、力も強そうな者ばかり。攻撃を喰らえばひとたまりもないだろう。

そんなことを考えながら彼女が身構えていると、囿うようにして数人の選手が近寄ってくる。

「お前、フードなんか被ってどうした？」

「……」

「まあいい、雑魚はさっさと退場してもらわないとなあ！」

大柄な男がフィーネに向かって走り出し、得物を振り下ろしたが——

「——消えた、だどっ!？」

攻撃がフィーネに当たったかと思われた瞬間、その体が霧となって消えた。

これはフィーネが所有するユニークスキル、鏡花水月によるもの。

一定の範囲内に精巧な幻影を生み出すという、強力なユニークスキルだ。

男たちが周囲を見渡すが、彼らの目にフィーネは映らない。

「あがつ!？」

「うっ!？」

だが次々と、フィーネを襲った選手たちが倒れ始める。

この異変に、司会のニーナもすぐに気付いた。

『おーっと！ フードをした選手を囿っていた選手たちが続々と倒れた！ 一体何が起きているのか!』

その声によって、フィーネに会場中の注目が集まった。

少し離れたところで各々の戦闘をしていた他の選手も、フィーネの方に視線を送る。

しかし当のフィーネは、そんな視線はお構いなしに、敵を次々と倒していく。

(集中……もつと深く、さらに深く——)

フィーネは目をスツと細め、ふうーと深く息を吐いた。

「さっさと退場しろ!」

男の振るった大剣がフィーネを斬り裂いた。

しかしその直後、フィーネの姿は掻き消え、大剣を持った男はその場で昏倒する。

『な、何が起きている！ フードの選手が斬り裂かれたと思っただら消えた！ これは熱い展開になるかもしれません！』

ニーナが熱く実況している中、数十人いた参加者も、もう片手で数えられる程度になっていた。すると、フィーネの前に一人の男が立ち塞がった。

「私はAランク冒険者のシーザ。強者と見込んで手合わせを願います」

フィーネは男をじっと見つめる。

(Aランク冒険者、今の私で倒せるか……)

フィーネはそう思いつつも頭を振って、不安を捨て去った。

ここで初めてフィーネは口を開いた。

「……わかりました」

「女性の方でしたか……良ければお名前を聞かせていただいても？」

「フィーネと言います。あなたと同じ冒険者です」

「フィーネさん。覚えておきましょう」

シーザが言い終わるや、二人は剣を構え対峙した。

「行きます！」

シーザは一瞬でフィーネとの距離を詰め、剣を振り上げた。

しかしフィーネは微動だにしない。

(――動かないだ?! いや、こちらの動きを追えていないのか?)

シーザは剣を振り下ろしたが、斬り裂いたような手応えはまったくもって感じ取れない。すぐに何が起きたか判断する。

「――後ろか！」

己の第六感のみで判断し、振り返り様に剣を振るうが――

「それは幻ですよ」

「なにっ!？」

突如身体とちうしんの横からかけられたフィーネの声に、シーザは身体を強張こわばらせる。

「終わりです！」

「まだだっ！」

フィーネの鋭い一撃。

しかしシーザは体を無理矢理捻ひねることで、それを回避かいひした。

不意打ちを避けられたことに驚くフィーネだったが、落ち着いて追撃を加えようと動く。

しかし当然、それにやられまいとシーザも動いていた。

「そんな攻撃でやられる私ではない！」

「くっ！」

攻撃を弾いて防戦一方となるフィーネに、シーザは告げる。

「守ってばかりでは意味がないですよ！」

フィーネは何も答えない。

数十の打ち合いの末、とうとうフィーネの体勢が崩れてしまう。

そのチャンスを見逃すはずがなかった。

「これで終わりだ！」

シーザのとどめの一撃がフィーネに当たった瞬間——フィーネの姿は霧散した。

「なっ!? いつの間にか! これも幻だったというのか!？」

「はい。その通りです」

そんなフィーネの言葉を聞きながら、シーザの意識は暗転した。

『おーっと! Aランク冒険者のシーザ選手が負けたあ! これは今大会のダークホースなのか!？」

彼女は一体何者なんだああ! これは本戦が楽しみになってきました!』

その頃には他の参加者もほとんど立っておらず、満身創痍で残る他の選手を、フィーネはあっさり撃退していく。

こうしてフィーネは見事、Aブロック予選を勝ち抜いたのだった。



俺、ハルトは客席に戻ってきたフィーネに劳いの声をかける。

「お疲れ様、フィーネ。とつてもいい闘いだった。腕を上げたな」

「ありがとうございます! でも、その……」

フィーネは辺りを見渡して、頬を紅潮させる。

さつき予選を突破した選手がいるのだ、目立つのも当然だ。

注目を浴びて恥ずかしいのだろう。

「心配要らないさ。本戦に出るんだ。胸を張れって」

「は、はい! 本戦でも頑張ります!」

フィーネは両手に握り拳を作っそう言うのだった。

次のBブロック予選はグレントという剣士が勝利をおさめ、続けてCブロックの予選が始まる。

『さーて! 次の試合はCブロック! このブロックでは誰が本戦出場を果たすのか!? もしかしたらAブロックのようなダークホースが現れるかもしれないよ!!』

そしてどうとう、アイリスの出番がやってきた。

「行ってくるね、ハルト！」

「頑張ってこいよ」

「言われなくても、みんな私が倒してあげるわ！ ハルトから貰ったこの剣があるんだもの。負けるはずがないわ♪」

アイリスはそう言つて鞆たもとに納められた二振りの剣に手を添えた。

「ははっ、そうかそうか。なら思いっきり暴れてこい！ 全員に目にも見せてやれ」

「うん！」

アイリスは俺たちから離れ参加者の列に加わりに向かった。

『——長らくお待たせしました。Cブロックの開始です！ 選手の皆さんは入場してください！』
今回も注目選手の紹介を終えると、続々と選手が入場していく。

まあ、俺がステータスを確認した感じ、他の選手で脅威になりそうなやつはいない。

アイリスなら問題なくこの予選を抜けられるだろう。

もともと、心配する必要はないとはいえ、応援はするつもりだ。それが仲間であり婚約者というものだから。

『それでは——試合開始!!』

ニーナの言葉で試合開始のゴングが鳴らされたのだった。

◇ ◇ ◇

ステージにゴングの音が鳴り響き、アイリスは周囲を見渡した。

フードもせずに素顔を晒すアイリスは、他の選手たちにとっては格好のカモに見えたのだろう。

選手たちがアイリスを囲む。

「へっへっへ、痛い思いしたくなかったら今すぐ棄権するんだな」

「俺たちは嬢ちゃんに怪我けがさせたくない」

「それでも降参しないって言うなら……」

アイリスを囲む選手たちは自らの得物を構えた。

「こういうことだ。わかるよな？」

アイリスを囲む選手たちは笑っていた。

口では心配するような素振りを見せていても、弱いものから排除しようという意思が丸見えだった。

そんな男たちに、アイリスは余裕の笑みを浮かべたまま口を開いた。



「もちろんよ。私が勝ってあなたたちが負ける。そういうことでしょうか？」
選手たちはアイリスの挑発に顔を赤くする。

「事実を言われて顔が真っ赤よ？」

「うるせえ！ 二度と剣を握れない体にしてやる！ やっちまうぞ！」

向かってくる相手に、アイリスは冷静に二振りの剣を抜いて構えた。

左手には魔剣トルトニス。右手には魔剣テンペスト。

アイリスが両方の剣に魔力を流すと、魔剣トルトニスはバチバチと音を立てて雷を、魔剣テンペ

ストは渦巻く風を纏う。

それを見た選手たちは攻撃するのを躊躇い、足を止めた。

「まさか魔剣、か？」

「マジかよ……」

「しかも尋常じゃない力を感じるぞ、アレ」

そう言葉を交わす男たちに隙ができたのを見て、アイリスは前方に踏み出した。

男たちは咄嗟に剣を振ったが、そんな剣がアイリスに当たるはずもなく――

「遅いわ」

「なにっ!？」

アイリスは華麗に回避し、一瞬で男の背後を取った。

そのまま魔剣テンペストを振ると暴風が吹き荒れ、数人がステージの外に吹き飛ばされた。

「相手が悪かったわね」

「な——」

続けて魔剣トルトニスを振るい、吹き飛ばされなかった数名をまとめて気絶させる。

そうこうしているうちに、ステージに立つのは残り数名となっていた。

司会のニーナが驚きの声を上げる。

『あの少女は一体何者なんだ!! 果たしてCブロックのダークホースとなるのか!? おーっと、ここで少女の情報が入ってきました!』

ニーナは大会の係員から用紙を受け取ると、その情報を読み上げた。

『なんと少女の正体は——ペルデイス王国第一王女、アイリス王女殿下です!』

その用紙には、皇帝であるオスカー・フォン・ガルジオからの情報が記載されていた。

アイリスの正体に、会場の至るところから驚きの声上がる。

一国の王女がこのような大会に出てくるなど、観客の誰も予想していなかったのである。

それは闘技場のステージに残っている選手も同じであった。

『まだあります!』

そうやってニーナは続ける。

『アイリス王女は、「魔王」や「殲滅者」といった二つ名で知られ、史上最強とも謳われるEXランク冒険者ハルトと共に行動をしていたようです! ちなみに、私ニーナはハルト様の大ファンです!』

その情報で、会場のどよめきはさらに大きくなる。

そんな中、一人の選手がアイリスに近付き声をかけた。

「アイリス王女殿下」

「ん?」

「私と手合わせをお願いしたい」

そう申し出たのは、一人の男。

アイリスはそれにあっさりと頷く。

「いいわよ」

「ありがたき幸せ。私はファルンと言います。こう見えてAランク冒険者をやっている者です」

「そう。知っていると思うけどアイリスよ」

お互い剣を構えて対峙する。

「では——行きます!」

ファルンはアイリスに接近する。

アイリスとの距離、数メートルを一気に詰めるファルン。

アイリスを自らの間合いに捉えたファルンは剣を振り下ろしたが、アイリスはその動きを見切っている。

あつさりど魔剣トルトニスで防ぎ、もう片方の手に持つ魔剣テンペストで薙ぎ払った。

「ぐっ！」

ファルンは吹き飛ばされるも、ステージギリギリのところで耐え、場外はまぬがれる。

そして顔を上げてアイリスの姿を確認し——見失った。

「消えただど!？」

「違うわね。消えたんじゃない。あなたでは私の動きが捉えられなかっただけよ」

その声と共に、アイリスがファルンの目の前でしゃがんでいた。

ファルンは逃げようとするが、時すでに遅し。

アイリスの振るう魔剣によって弾き飛ばされて、今度こそ場外となった。

それから残りの選手を倒したアイリスは、難なくCブロック予選突破を成したのだった。



その日の晩。

「フィーネ、アイリス。予選突破おめでとう」

「「「おめでとう!」「」」」

俺、晴人はもちろんのこと、クゼル、エフィル、鈴乃、アーシャも、予選突破したフィーネとアイリスを祝う。

ゼロもぼちぼちと拍手していた。

「二人ともよくやったな。アイリスはディランさんに自慢できるな」

「そうですねアイリス様! 凄いです!」

そう言った俺とアーシャに対して、アイリスは首を横に振った。

「まだよ。目指すは優勝あるのみ!」

「それだけは私だつて譲れません!」

フィーネも優勝を狙っているようだ。

それもそうか。本戦に出るんだから目指すは優勝だよな。

「後は明日のクゼルだが——まあ、大丈夫か」

「なんだその言い方は。私だつて応援くらいしてほしいぞ?」

「クゼル、心配ないと思うが頑張れよ。お前の実力は誰よりも評価しているつもりではいる」

「そこまで言われると照れるが、任せろ! 明日が楽しみだ。どんな強者がいるのだろうか……」

頬を染めるクゼルは、明日の試合に想いを馳せているようだ。

ダメだコイツ……もう病気だ。いや、元からか。

相変わらずのクゼルを見て、俺たちは笑うのだった。

第3話 予選二日目

そして翌日。

朝早くから、クゼルが出場するEブロックの予選が始まった。

開始と同時にクゼルを囲む筋骨隆々の選手たち。

昨日と似たような光景だ。

まあ、女性参加者が少ないようだから、こうなるのも当然ではあるか。

「クゼルさん、勝てますよね?」

「当たり前だ。クゼルがあ程度の奴らに負けるはずがないからな」

そんなファイネの呟きに俺はそう返した。

どうもフラグに聞こえてしまいそうだが、クゼルのレベルは高いから問題ない。

俺たちはステージ上に視線を向けるのだった。

◇ ◇ ◇

クゼルを囲む選手の一人が、ニヤニヤしながら口を開く。

「へっへっ。嬢ちゃん、痛い目見たくなければ——ふぐうううっ!」

次の瞬間には男が吹き飛び、そのまま闘技場の壁にめり込んだ。

「……は?」

そんな間拔けな声が、クゼルを囲んでいた男たちから上がる。

何が起きたのか?

その答えは単純だ。

クゼルが男の懐に入り込み、蹴り飛ばしただけである。